



TITLE:

一言・ふたこと ユーザーとサーヴィサー - 双方向の通信 -

AUTHOR(S):

鷹尾, 和昭

CITATION:

鷹尾, 和昭. 一言・ふたこと ユーザーとサーヴィサー - 双方向の通信 -. 静脩 1968, 5(4): 3-3

ISSUE DATE:

1968-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36485>

RIGHT:

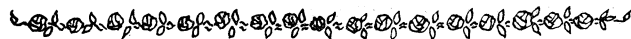
~~~~~ 一言・ふたこと ~~~~~

コンピューター、図書館、ゼロックス。三題話のようなが、いずれも私の研究生活に欠かせないもので、しかもかならず誰か専門家の手に依存している。そこによく言われるユーザー側とサービス側との関係がある。考えてみればユーザーとしての私はかつてな注文をする。計算結果を早く出してくれ、ゼロックスをすぐやってくれ、登録に出した本が何箇月も戻って来ないのは困る、等々である。何年か研究室に居ると、受入れ側の事情もある程度わかるだけに、自分の研究上の必要性と板ばさみになることがしばしばである。そこで思うのだが、両者の協力で改善できることはないであろうか。例えば

ユーザーとサーヴィサー  
 双方向の通信

きは、季節によって所要日数に非常に差があるようだ。このラッシュを時差出勤の要領でさばけないだろうか。そのためには、いつがすいているかのPRが必要になる。他にもいろいろの問題があるろうが、もっとお互いのコミュニケーションを密にすることで、この限られた人員と予算のわく内でのベストを見出したいものである。「静脩」ではユーザーに比べてサービス側の発言が少ないように思う。目標を持ちながら手段のわからないわれわれユーザーに対して、積極的に知恵を貸して頂くことをお願いしたい。

(工学部講師 鷹尾和昭)



日本農業の実証的な研究を行っている私にとって、最近、痛切に感じるものが2つある。ひとつは、戦後、ここに数年間、官庁統計が多分野にわたって発表され、その内容が豊富化されつつあること。もうひとつは、戦前の資料は現在にくらべずっと豊富に図書室に整備されていることである。実証研究を旨としている私にとって、統計資料は研究の生命源であり、それが豊富に発表されることは何よりうれしい。しかし、学部資料室には戦後の農業センサスや工業統計といったもっとも基礎的なデータでさえ完備されておらず、近年、20余種も発行されている白書類は、数種しか購入されていないというのが現状である。この現状では、

図書費の不足に思う  
 経済学部の場合

状態を放置するならば、今後、統計の発行数が増加するにつれて、基本統計でさえ入手できないものが続出するであろう。

日本経済の高度成長がうたわれてから10数年、急速な生産力の発展によって国民総生産は資本主義諸国内で第2位になったという。こんな時代に、全国300余大学の全学部で官庁統計を無料で配布するといった簡単なことが、なぜできないのだろうか。大学院生を含めて研究者が必要とする書物や資料を自由に購入できるだけの図書費が、なぜ保障できないのだろうか。乏しい図書費までが年度末に近づくと数%削減されるという昨今、ここらでこの悪癖を立ち切るよう努力しないと、将来、本学の図書歴史に大きな禍根を残すことになる。

(経済学部大学院 中野一新)